

紫の上の人物造型

今井明日香

(山崎ふさ子ゼミ)

はじめに

源氏物語は千年の月日が流れた今でも、その魅力に取りつかれる人は絶えない。千年前の男性の政治的な考え方、女性の嫉妬や羨望を事細かに描き出している。源氏物語は読んでいて、千年前にも私たちと同じように、感情をもった人間が存在しているという、その当り前のことを再認識させられる。それほど源氏物語は人々の生きざまを細かに描写しており、人間の心理変化なども上手にとらえ、描き出している。源氏物語はその名の通り光源氏を主人公とする、政治的戦略、それに振り回される平安時代の女性たちを描いた物語だ。その中でも私の興味をひくのは、源氏物語に登場する女君の中で一番深く源氏に愛され、一番長く登場する紫の上である。源氏物語の中では唯一その生涯を以って平安宮廷における女性の生き方が描かれており、且つ平安の時代における理想的な女性を押し付けられている女性である。彼女は平安の時代の理想の女性像のように描かれているがその生涯の全ては決して華やかなものではなかった。

紫の上は源氏の初恋の女性、藤壺の姪であり、容貌もそっくりであったために幼いころに源氏に見初められ、誘拐にも似た形で引き取られる。そして源氏に育てられ、源氏と結ばれ、その後は穏やかに暮らすが、自分に子が出来ない中、他の女性に子供が授かり、苦悩する。また、自分は源氏にとって正妻なのかどうかといった不安定な地位。しかし、源氏は高位の女性を妻にしたい願望があり、結局は女三宮という高位の女性を正妻として迎えるものの源氏の愛は一層紫の上に向けられた。しかし彼女は出家を望む。どうしてそこまで源氏に愛されるのか。それだけ源氏に振り回されてどうして源氏を愛し続けられたのか。そして、最後で出家を願う彼女の心境とは。今の時代

の女性でももつような嫉妬の苦悩と葛藤、そして人間のもつ自己分裂の形までをも紫の上の中に表現されている。源氏に振り回される中でおこなう自分という存在、自己形成。そのようなことが描かれている紫の上に興味をそそられ、その人物造型を辿ってみたいと考える。

—

はじめに作中の紫の上は具体的にどのように描かれているのかを見ていく。紫の上の評価は、研究者による紫の上論評が始まった当初から、物語中では統一的な内面が見られないという印象が否めないといわれている^{*注(一)}。源氏物語を紫の上の焦点を当てて読んでみると、ここで紫の上の心情は、と思うところでその心が書かれていないことがよくある。そんな中で紫の上についての描写をみて紫の上の性質を考察していきたい。

まず、紫の上にとって切っても切り離せない藤壺との「紫のゆかり」がある。主人公である光源氏（以下源氏）が紫の上を引き取るきっかけとなるのが、紫の上を北山で発見した際、彼が恋い焦がれてやまなかった藤壺に瓜二つであると思ったことである。だから物語の中で源氏が何度か藤壺と紫の上を比べることがあるが、「朝顔」の巻で源氏は紫の上自身に対し、二人を比べ評しているので次に引用しておく。

やはらかにを(お)びれたるものから、ふか深うよしづきたるところのなら並びなくものし給しを、君こそはさ言へど、紫のゆへこよなからそずものし給ふめれど、すこしわづらはしきけ添ひて、かどかどしさのすゝみ給へるや苦しからむ。

(以下、本稿では源氏物語本文の引用は『源氏物語 新日本古典文学大系19～23』(岩波書店 / 1993年～1997刊)による。頁数も同書を示す。朝顔 269頁 11行)

「若紫」の巻で紫の上は、源氏に、彼が恋い焦

がれているけれども帝（父）の妻であるからに結ばれることはできない藤壺のゆかりとして、またその形代として半ば強引に引き取られる。形代であるから、源氏の心中では藤壺と比べられることも多いが、ここで初めてそれを紫の上に面と向かって論ずる。やさしくゆったりとしているものの、深くたしなみを身につけている（同頭注33参照）と藤壺を褒め、紫の上はさすがに藤壺のゆかりとしてよく似ていらっしやるようだが、少し厄介なところがあって、きかぬ気がまさっているところが困ったことという感じがする（同頭注33～34参照）と紫の上を評する。藤壺に似ているところはよしとするが、嫉妬深いところはよくないとの旨を婉曲に批難する。

また一方で、作者は源氏に紫の上をどのように評価させているかという「らうたし」、「らうたく」という形容詞を多く使って「可愛い」「可憐だ」と表現させている。

「若^{わか}の御ありさまや」とらうたく見たてまつり^{（たまひ）}給て、日ひと日、入り^いあて^{なぐさ}慰めきこえ給へど^と解けがたき御けしきいとゞらうたげなり。
（葵 330 13行）

「なんと子供っぽいご様子が」と可愛らしく思い、一日中居続けて慰めるが、うちとけない様子がますます可愛らしい（同頭注15～16参照）と、ここでは可愛いや可憐を意味する形容詞「らうたし」が繰り返し使われ強調されている。源氏は紫の上をことあるごとにこの表現で表し、嫉妬深さを批難しつつも、その点に置いて「らうたし」と思い、格別にかわいがっているさまが見受けられる。

いとおほどかにうつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに^{しふね}執念き所つきてもの^衆怨じしたまへるが、中なか^{（い）（ぎやう）}あひ行づきて、腹立ち^{はらだ}なし給をおかしう見所ありとおぼす。（濤標 106頁 8行）

おっとりとしてかわいらしく、もの柔らかでいらっしやるものの、とはいえ一つの事にこだわる性分もお持ちで、嫉妬なさる、その様子がかえって魅力的（同頭注8参照）との評だ。源氏は嫉妬も紫の上の一つの魅力と感じているようである。

また、第三者から見る紫の上の評としては、源氏が須磨に行った際、源氏方の女房が紫の上のい

る御殿にわたった時に、

みな渡り^{わた}まいりしはじめは、などかさしもあらむ、と思ひ^{（お）}しかど、見たてまつり^ち馴るゝまゝに、なつかしうおかしき御ありさま、まめやかなる御心ばへも思ひやり^{ふか}深うあはれなれば、まかで散るもなし。（須磨 37頁 4行）

源氏の御殿に仕えていた女房たちが紫の上に仕えることになり、紫の上の御殿に参上した当初は、紫の上を、どうしてそんな素晴らしいことがあるうかと思っていたが、仕えて馴れるほどに女房たちへの心配りや細かい気遣いまで立派なので暇を取る女房もいなかった（同頭注16参照）。『などかさしもあらむ』、つまりは、女房たちが自分の目で見る以前に世間に漏れ聞こえる評価は素晴らしいと見逃せなかったということである。しかも、自分の目で見ても世間の評価同等、もしくはそれ以上に素晴らしいというのである。

この女房の評価ともう一つ、長年の恋敵の明石の方が、紫の上について評しているのは見逃せない。明石姫君（女御）の入内の際、後見に付くにあたり紫の上と対面した際、

そこの^{なみ}御中にもすぐれたる御心ざしにて、^{なら}並びなきさまに^{さだ}定まり^{（たまひ）}給けるも、いとことばり、と思ひ^{おも}知るゝ（藤裏葉 190頁 13行）

他の姫君の中で源氏に格別の寵愛を受けるのも、またその地位を得ているのもまことにもっともなことだ（同頭注15参照）と明石の方は思う。また、その後明石姫君（女御）を挟んで紫の上の関わっていく中で、

人より^くことにかくしも具し給へるありさまの、^{（わ）}ことはりと見え給へるこそめでたけれ。（若菜上 290頁 7行）

と、容姿、気配など人並み優れて、他の方々が到底及ばないほど完璧であるのも無理からぬことで、素晴らしい、と明石の方は感じる。知れば知るほど完璧であるという印象を受けると書かれている。

そして、この紫の上が養育した明石姫君（女御）の入内の際して、生母の明石の方を後見につけるという一件について見てみても、源氏が明石の方を後見につけようか迷っていたところ、紫の上から明石の方を推薦した。それを聞いて源氏は、

「いとよくおぼし^よ寄る哉」（藤裏葉 189頁 9行）

「なんとよく気がつくことだ」と思う。紫の上からすれば、つまらない恨みは買いたくないという考えからだが、そのように源氏の考えを先読みし、明石姫君（女御）や明石の方の心中まで察する行為は、ものわかりのよさを描いているようにみえる。

幼少のころを見れば、かわいいと評されると同時にその利発さが描かれている。

見るまゝに、いとうつくしげに生ひなりて、
愛敬つきらうらうじき心ばえいとことなり
(花宴 280頁 4行)

みているうちにとても美しく育て、愛らしく利発な気性は格別である（同頭注4参照）。

心ばへのらうらうじく愛敬つき、はかなきたはぶれごとのなかにも、うつくしき筋をし出で給へば（葵 329頁 7行）

気性が利発で愛らしく、ちょっとした遊びの中でも利発さが窺える（同頭注30参照）。

おっとりしていて、もの柔らか。可憐でかわいいが嫉妬深い。女房たちにも気配りがよくできて素晴らしい。また利発で聡明でものわかりのよい。源氏物語で紫の上はそのように表現されている。

そのような気性で描かれている紫の上であるが、以上のことを踏まえて、ではなぜ紫の上は長きに渡り登場し、源氏の寵愛を受けることが出来たのかを物語の描写をもとに考える。

まずはやはり、「紫のゆかり」藤壺との容貌酷似である。「若紫」の巻で源氏が紫の上を見初めた時、

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいはりたるひたいつき、
髪ざしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給。さるは、限りなう心をつくしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらる〔ゝ〕なりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。（若紫 158頁 9行）

容姿がとても可愛らしい、美しい。これから大人になっていく様をみてみたい人だな、と目をとめた時、ああなるほど、大人になった所を想像してみるとよく藤壺に似ているではないか。そう思い、涙が出そうになる源氏である（同頭注11～14参照）。また、「賢木」の巻でその藤壺を目の前に、気持ちを抑えきれなくて忍び、物陰から藤壺を見

やる時になぜか、源氏は藤壺を美しいと思うと同時に紫の上を思い出すのである。

髪ざし、頭つき、御髪のかゝりたるさま、限りなきにほはしさなど、たゞかの対の姫君にたが違ふ所なし。（賢木 361頁 9行～）

源氏は藤壺の髪を生え方、頭の形、髪が背中にかかっているさまなどこの上ない美しさが、紫の上にとてもよく似ていると思う。われわれのふつうの感覚では、長年想い続けていた女性が目の前に現れた時他のことを考える余裕などないのではないかと思ってしまうが、しかし源氏はここで藤壺と紫の上が似ていることを一瞬思い出す。奇妙な感覚にとらわれるが、それによって「紫のゆかり」が源氏物語に一貫して提示し続けられるテーマだということを認識させられる*注(二)。紫の上が源氏に愛される起因は藤壺との容貌酷似である。しかし、それが一貫したテーマであっても、容貌が酷似しているだけでは紫の上が長年愛され続ける理由には乏しい。現に同じ藤壺のゆかりとして登場する女三宮はその幼稚さに源氏を落胆させる。藤壺との容貌酷似是物語の上で切り離せないが、それとは他に紫の上の内面が「長く」愛される理由になる。

先に述べた通りに、紫の上の性格の一つとして嫉妬深いとされている。しかし、その女の感情の中で欠点とされる嫉妬を、彼女はうまく見せている。嫉妬深い女の例で言うところ生霊となった六条御息所がいるが、生霊となり源氏の正妻であった葵の上をとり殺し、自身も深く悔やむ。それに比べ、紫の上は同じ嫉妬に悩まされながらもそれとうまく付き合っていく。

わざとならず、「身をば思はず」などほのめかし給ぞ、をかしらうたく思ひきこえ給。
(明石 88頁 9行～)

『身をば思はず』というのは

わすらるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

忘れられる自分がかまわないが、忘れる源氏が神仏の咎めを受けて死ぬのではないかと心配だ。（拾遺集・恋四・右近）

という『拾遺集』の歌を引いて（同頭注12参照）、明石の方を思い出し物思いにふける源氏に対して紫の上が婉曲に恨みを述べる場面である。『わざ

とならず」と、さりげなさを装いつつも頭の回転ははやく、歌を引くことによって洒落っ気を交え嫉妬をあらわす。そのようなところに才気が感じられる。紫の上は嫉妬の猛りをそのまま源氏にぶつけたりしない。あくまで（身寄りが他にないせいもあるかもしれないが）源氏につき従う大和撫子の紫の上である。

さりげなさを装いつつもあまり嫉妬心を隠さない紫の上であるが、紫の上の嫉妬に対する考え方は、「朝顔」の巻で明かされている。

よろしきことこそうち怨じなどにくからずき聞
こえ給へ、まめやかにつらしをおぼせば、色
にも出だし給はず。(朝顔 259頁 13行)

なんでもない浮気沙汰であれば愛敬程度に、怨みごとを言うこともできるが、朝顔齋院とのことは本当に辛いと思うので顔に出さない（同頭注2参照）。自分が表に出す嫉妬心は心の底から恨んで言っているわけではない。しかし、源氏が自分より身分の高い朝顔齋院を正妻として乞うているならば、浮気程度のものではない。そういったことに恨みを言ってしまうと心の底からの嫉妬になってしまうとわかっている。本気の嫉妬は自分の価値を下げるものと感じているのである。源氏の他に身寄りのない紫の上であるからこそ、辛いと思っても耐えねばならない。そう思うのは自分自身の価値を下げてしまわぬよう、必死のプライドの確保であるといえる。

とはいえ、嫉妬自体はよくないものであるとも自覚しているようである。「濔標」の巻にて、源氏とこんなやりとりがなされている。明石の方との間に子供が授かったことを打ち明けた際のやりとりである。

……にくみ給ふなよ」とき聞こえたまへば、おもて面
うち赤あかみて、「あやしう、常つねにかやうなる筋すぢ
のたまひつくる心のほどこそ、われながらう
とましけれ。……（濔標 105頁 1行～）

源氏に嫉妬するなよ、と先に指摘されて紫の上が赤面する場面である。そういった心が存在することは疎ましいものだと紫の上自身が発言している。その利発さゆえ、見て見ぬふりの出来る女性であることが、源氏の目にいい女であると映ったことであろう。「朝顔」の巻も然り、気づいても言わないことができる。

そして、他のプライドの高い姫君と比べ、涙を見せることを惜しまない。且つ、それを耐えようとしてみせる所がまた賢い。源氏が須磨へ不祥事によって退去することになった際の紫の上の哀しみ方は

はしら柱隠れにかくみ隠れて、涙をまぎらはし給へるさま、
（なほ）猶こゝら見みるなかにたぐいなりけり、
とおぼしし知らるゝ人の御ありさまなり。（須磨 13頁 7行）

紫の上が柱に隠れるようにして座り涙を紛らわしているさま、源氏がたくさん知っている女性の中でも格別だ（同頭注25～27）と思う。さめざめ泣くのではなくて、我慢しようとするのだけれど、溢れてくるという感じである。また、出立の時にになると、

み御簾巻まき上あげて、端はしにいざなひきこえ給へば、
女君泣なき沈しづみたまへるを、ためらひてみざり
出で給へる、月影（を）にいみじうおかしげにてみ
たまへり。（須磨 21頁 13行）

いつまた会えるかもわからない別れに泣き沈んでいるのを、源氏が呼び出し、悲しみを抑えて出てくる紫の上を月が可憐に映し出す場面である。その姿を見た源氏はなかなか紫の上から離れることが出来なかった。またその際、紫の上の詠んだ歌は、

おしからぬ命にかへて目の前の別れをしばし
とゞめてしかな（須磨 22頁 5行）

どうなっても構わない私の命と引き換えに、今のこの別れをしばらくの間でも引き留めたい。（同頭注4参照）源氏のためならば命をも惜しくないと思う紫の上であるが、命と重いものを引き合いに出したとしても、ただ、少しでも引き留めたいだけという謙虚な姿勢が、可憐な女性を想像させる。涙を押し堪え、謙虚にも、深い愛にもとれる歌を詠まれては、源氏もさぞ離れがなくなったものだろうと思わせる。

また彼女は、自分の身分もわきまえている。源氏の他の姫君と比較された時にも謙虚な姿勢を保つ。「梅枝」の巻で源氏と紫の上が仮名論議を行った場面で、源氏が六条御息所、藤壺、朧月夜、朝顔齋院の筆跡を論評する中で、

……かの君と、前齋院と、こゝにとこそは書
き給はめ」とゆるし聞こえ給へば、「この数

にはまばゆくや」と聞こえ給へ（梅枝 161頁 13行～）

『かの君』とは朧月夜を指すが、朧月夜と朝顔齋院と紫の上の筆跡は格別だという源氏に、その中に入れて頂くのは恐れ多いと謙遜する（同頭注 40～42参照）。女であれば誰も愛する人の一番になりたいと思うゆえに他の女性と比べられることは面白くないだろう。しかし、そこで謙虚な姿勢が保てるのは源氏に一番愛されているのは自分だという自信があるからだ。ましてや謙遜した相手は朧月夜と朝顔齋院である。朝顔齋院については後に詳しく述べるが、朧月夜と源氏には煮え湯を飲まされている。源氏が須磨に退去するという、源氏にとっては自業自得のことであるが、紫の上にとっては自分には関係のない事件で愛する人と離れ離れにされる事件の相手だ。恨んでも憎んでもおかしくない相手のことを無神経にも話してくる源氏に対し、謙遜することは普通では出来ない。しかし、本心かどうかはさておき、そうすることのできる女性だった。そして源氏は紫の上の筆跡は格別なのに、と思う。その思いは紫の上自身が格別だという評価へ繋がる。だからこそ、源氏は心の底から気を許し、紫の上になんでも話してしまうと、作者は語っている。

二

次に、物語の中でその人物像が色づいていく紫の上の生涯の苦悩について考える。紫の上の人物像が色づく彼女の主だった生涯の苦悩といえは、明石の方懐妊、源氏の朝顔齋院への求婚、女三宮の降嫁がある。前述でも少し触れたが、源氏に振り回された女の一人である六条御息所は、その自尊心ゆえに生きながらにして怨霊となってしまった。亡くなってからもなお、紫の上にとりつくなどして、女の嫉妬の怖さを源氏物語ではあらわしている。しかしそれに比べ、紫の上も彼女と同様、もしくはそれ以上に源氏に振り回されたはずなのに生霊とならなかつた。嫉妬という醜い心をどのように昇華したのか。紫の上に降りかかった、彼女にとっての主だった厄災、そしてその克服の仕方から考察する。

まずは明石の方懐妊についてであるが、ここで鍵になるのは紫の上には生涯子供ができなかつた

ということである。そして源氏の子供を生んだ女性が明石の方だということは、あまり着目されることはないが、明石の方が謙虚で器量の良い女性だからこそ、紫の上は嫉妬を隠すことができなかつたと考える。

はじめ、懐妊のきっかけとなる源氏の須磨への退去を決意した際、紫の上は須磨へついていきたいとほめめかすが、源氏はそれをしない。源氏にとっては、紫の上を苦勞させることが嫌で、またそうすることが自分の悩みの種になってしまうかもしれないと思ってのことだが、結果、その退去で明石の方と結ばれる。涙をのんでの別れだったにも関わらず不誠実な源氏の対応だからこそ紫の上は苦悩させられる。

かゝる方のことをば、さすがに心とゞめてうらみ給へりしおりおり、^(老) ^(老) などであやなきささびごとにつけても、さ思はれたてまつりけむ（明石 78頁 10行）

源氏の女性関係については、心にとどめてはいるけれども恨んでいるだろう折々、つまらない遊び半分の恋愛ごとについても辛い思いをさせた（同頭注16～17参照）とは源氏の心中である。これ以前に紫の上の嫉妬について詳しく書いてはいないのだが、紫の上は嫉妬をする女であると源氏は認識している。しかし『心にとゞめて』いるということは、そこまで激しい嫉妬ではなかつたとうかがえる。それまでは嫉妬はしているものの穏和に振る舞っている、もしくは振る舞おうとしている。しかし、源氏が帰京し、その様子をうかがっている紫の上は明石の方に対し激しい嫉妬をする。^{ふて} ^(笑) 筆などのいとゆへづきて、やむごとなき人苦しげなるを、かゝればなめりとおぼす（澗標 109頁 1行～）

明石の方の筆跡に品があって、高貴な女性もかなわないうように見えるのを、紫の上は、だから源氏は明石の方を忘れられないのだろうと思う（同頭注17）。明石の方の筆跡をみて嫉妬するほど気にしている。源氏の女性関係についてそれまでは穏和に構えているとされている紫の上がそこまでするのは源氏が明石の方に対し執着を持っていると聡明な彼女は気づいている。ただでさえ、自分には子供が授からない。それなのに源氏が執着するような女性の懐妊であるからこそ、嫉妬を明ら

かするのである。もちろんそれは懐妊したからこそその執着かもしれないが、後々源氏が明石の方に対して他にはない人と褒めちぎることになるのは他でもない明石の方の人間としての器量のよさにある。しかし源氏はこの時自分の執着に自覚があるのかないのか

「まことは、かくまでとりなし給ふよ。……

(澗標 108頁 13行)

ほんとうにそこまで勘繰るのだな(同頭注12参照)と、紫の上の嫉妬に心から驚いている。その点から見ても、他の女性関係に対してはさほど嫉妬心を見せない女性であるという点がうかがえたと共に、明石の方が源氏の子供を生んだこと、器量の良い女性であることの二点から源氏にとって無二の存在であるということを確認していることがわかる。

そういった今までにない激しい嫉妬心に悩まされるもその嫉妬の心が中和されるきっかけとなったのが明石姫君の養育を任されることである。

児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば(松風 210頁 2行)

子供を可愛がる性質の持ち主だ(同頭注2参照)という記述もここにきてはじめて見られる紫の上の性質である。明石姫君を引き取り可愛がることによって、嫉妬心も薄れる。

女君もいまはことに怨じきこえ給はず、うつくしき人に罪ゆるしきこえ給へり。(薄雲 223頁 14行~)

明石の方への嫉妬心も薄らぎ、姫君に免じて大目にみる(同頭注29参照)。源氏の明石の方執心の様子も横目で見やる風でいられ、明石の方のことを思うにつけても

いかに思(おもひ)をこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまを(薄雲 225頁 12行)

この姫君の可愛さに自分だったとでも恋しくてたまらなくなるに違いないのに、明石の方はどれくらい姫君を案じていることだろう(同頭注38参照)と、明石の方をも思いやることができるぐらいに心の余裕が持てるようになる。子供が好きな性質のおかげで実子のない紫の上は、明石の方懐妊による危機を彼女は乗り越えられたといえる。

ただ、嫉妬心を抑え、さらには明石の方に対して思いやる心が持てたのは、紫の上より明石の方

の身分が低かったからである。次に訪れる紫の上の苦悩は正妻の座を奪われる危機である。源氏が自分より身分が高位の朝顔君に求婚しているという噂をきく。はじめ、紫の上はその噂を聞いてもまさか、そんなことがあるならば隠してなどせず自分に説明があるだろうと源氏を信じるのだが、源氏の様子を見ていれば、どうもそわそわしている。なるほど、噂は本当なのだと感じてしまうのである。今までの浮気沙汰とは違い、自分の地位が脅かされることに深刻に動揺する。紫の上はここで、自分は頼る後見人もなくなると頼りない身なのだろうかということに気づくのだ。そして、『よろしきことこそうち怨うらじなどにくからず聞こえ給へ、まめやかにつらし(朝顔 259頁13行)』と思う。しかし、紫の上が、源氏が何も語ってくれないその辛さに涙をこぼす様子を見て、朝顔の君とは何もないと潔白さを弁明する。そして源氏が今までの女性の事を語る。そうして最後に紫の上の詠んだ歌は、

こほりとぢ石間いしまの水はゆきなやみ空すむ月のかけぞながるゝ(朝顔 271頁 3行)

氷が張って石間の水は流れとどこおっているのに、空に澄む月の光は西へと傾き流れていくと詠み、先刻までの朝顔齋院への嫉妬も、自然観照のうちに封じこめられる(同頭注143参照)。朝顔齋院の件の弁明からこの詠歌までに紫の上の気持ちの変化は描かれていない。そんな中このような自然観照のみの歌を最後に詠む紫の上を推測すれば、本当は源氏の浮足立っているような様子からみて、朝顔齋院への求婚は本気なのだろうと察知した紫の上だが、他に後見も身寄りも頼るすべもない彼女にとって、源氏だけが頼りなのだ。本気なのではないかとうすうす感じつつも、源氏の言葉を信じようと努力しているのである。また、源氏が女性評を語ることによって、これからも自分にはなんでも話してくれるだろうと思おうとすることで、自分を保っているようにみえる。にわかに信じられない気持ちの分は自然観照で封じこめる。源氏も朝顔齋院は自分に見向きもしないと説明しているゆえ、穏和な性格の紫の上は彼女を憎むことで解消することはできないだろう。自分のどうにもならないやりきれない気持ちを人ではなく、自然の中に封じこめるとはさすがに賢く、且つ風流

人である。本当はそれまで無条件に信じていた源氏から裏切られたような気持ちを持ったのだろうが、結果、信じることで乗り越える。しかし、紫の上は源氏の邸において、確固たる地位を持たない状態をあらわにされ、ここからは双方の信頼と愛情のみによって保たれる関係になってしまうのである。この巻によってしばらくはより一層、信頼関係を深まるのだが、それも結局女三宮降嫁によって打ち砕かれる。

女三宮降嫁。それは紫の上に大ダメージを与える事件である。朝顔の巻でのショックが再び訪れる。月が満ち、欠けていくように、これまで上昇気流に乗っていた紫の上の運命は、女三宮が降嫁するこの「若菜」の巻で下降の一途を辿る。このころには紫の上は三十一歳という年齢である。年を重ねて美しくなったとはいわれているが、そうはいっても夫が、自分が年をとってから新しい若い女性を妻に迎えるとは、それまで正妻位置にいた紫の上にとっては堪えがたい苦痛である。自分への愛情が薄れるかもしれないと思うだけでなく、世間からの目も気になる。彼女のことを悪くいう継母もいるのだ。紫の上の実父兵部卿宮の正室である。彼女がいることによって紫の上のシンデレラストoryは成立し、源氏が紫の上を誘拐にも似た形で引き取ることが正当化されるのだが、紫の上は晩年になって継母の紫の上に対する冷たい態度や悪評を大変気にしている。源氏もそれをわかっていながら、紫の上はその苦痛を強いるのである。自分の愛は変わらないどころかより一層深くなるから、堪えて欲しいという。かさねがさね嫉妬はなさるなと繰り返す源氏。しかし源氏の心配をよそに紫の上は冷静に返す。源氏に女三宮が降嫁する話を告白された際も、

いとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあなれ。こゝにはいかなる心をきたてまつるべきにか。めざましく、かくてなど、とがめらるまじくは、心やすくてもはべなんを、かの母女御の御方さまにても、うとからずおぼし数まへてむや」と卑下し給(若菜上 232頁 6行)

まったく表情を変えずに、「大変な依頼ですね、私がどのような良くない心を持ちましょうか。目障りであると思われなければ、ここにおいて欲し

いものです。女三宮の母もおばに当たる方ですし、他人とは思わずに認めてもらえないでしょうか」(同頭注8~12参照)と、いかにも謙虚な姿勢で同意する。もちろん心中は苦悩でいっぱいなのだ。それでも源氏は紫の上の女三宮の降嫁は自分の本意で同意したのではないとの説明をするので紫の上も

かくそらより出で来にたるやうなる事にて、のがれ給がたき(若菜上 233頁 1行)

天から降ってきたようなことなので逃れられなかったと解釈し、気にしないそぶりをする。噂をする侍女たちをもいましめ、

かくおしはかる人こそなかなか苦しけれ、世中もいと常なきものを、などてかさのみは思なやまむ(若菜上 243頁 4行)

悪くいう人がいることが辛いけれども、世の中は無常であるものなのでどうして思い悩む必要があるのか(同頭注21~22参照)、そう自分に言い聞かせてその苦悩を乗り越えようとする。もちろん、そう自分に言い聞かせるだけで心がどうかなるものでもない。源氏がいなくて眠れない夜を幾度も過ごす紫の上自身にもわかっていることであろうが、それよりなによりプライドもある。長年連れ添ってきた源氏がいくら紫の上を愛しようとして、またそういった態度や言葉で示そうとも世間の目を気にしなくてもいいような年齢でもない。女三宮のもとへなかなか足を向けない源氏を紫の上がいましめもする。

とみにもえ渡り給はぬを、「いとかたはらいたきわざかな」と、そゝのかしきこえたまへば.....(若菜上 241頁 8行)

なかなか女三宮のもとへ行かない源氏に、ぐずぐずしてはあちらの方が気の毒ですよ、と源氏を催促している(同頭注22参照)。そのように今までのように物わりのいい穏和だと世間から評される素晴らしい人物を演じること、プライドを守ることで紫の上は自身を保っている。

しかし先にも触れたが、紫の上は源氏がいなときは眠れない夜を過ごす。どれだけ平静を装っても、心はついていかない。どうにか気を紛らわせようと彼女がとった行動は女三宮と親密になること、女一宮の養育、明石の方と融和することだ。源氏の世界以外を知らない紫の上にとって、他の

女君と接することは、真新しいことで気晴らしにもなる。そしてかつては憎いと思っていたらう明石の方や、苦難を強いる女三宮を仲良くするというので、紫の上が人を憎みたがらない性格であるとわかる。女一宮の養育することで源氏のいない夜を紛らわすことは、なんとも子供好きな紫の上らしい。しかしそういったことも結局この苦しみを乗り越えたわけでも克服できたわけでもない。やがて紫の上の思案は出家といった源氏の懐の中から逃れることへと向かうのである。

三

では、紫の上の出家願望について詳しく解釈するが、朝顔の巻以前は源氏と紫の上は目に見えない、双方の愛情と信頼でのみ繋がっていた。しかし、その信頼は血の繋がりに以上強いものであり、朝顔の巻以降、紫の上は源氏を信じることによって己の価値を見出していた。女三宮降嫁の噂が持ち上がった時もまさかと、露ほども源氏を疑いはしなかった。

かゝる御定めなど、かねてもほの聞き給けれど、さしもあらじ、前齋院をも、ねんごろに聞こえ給やうなりしかど、わざとしもおぼしと遂げずなりにしを (若菜上 230頁 14行)

女三宮降嫁の噂は聞いているけれども、朝顔とも思いを遂げようとはせずに終わったのだからまさかそのようなことはあるまい (同頭注18~21参照) と思っていた紫の上。前齋院、朝顔への求婚事件は未遂に終わっていたから、女三宮降嫁で今度こそは源氏に裏切られたと感じる。後見のない紫の上にとって源氏の世界が全てであり、生きる価値もそこにあった。信じていたもの全てが壊されることになるこの女三宮降嫁事件でこの世の無常を思い知らされる。そしてそれが出家願望につながった。それでもすぐには出家したいと言いたすわけでもないが、「若菜」に入ってから、読者がうける紫の上の印象は急激にうすくなる。それは紫の上が感情を自分の中にとどめようとするからである。源氏も、

うらもなくなつかしき物から、うちとけてはたあらぬ御用意など、いとほづかしげにおかし。限りなき人と聞こゆれど、かたかめる世を、とおぼしくらべらる。(若菜上 244頁 11

行)

心を閉ざしているふうでもなくやさしいものの、うちとける風でもない感じが、ほんとうに源氏の方が恥ずかしくなるくらい風情があり、この上なく高貴な方でもこれほどの人はいない (同頭注11~12参照) と思う。紫の上が少し今までとは違う様子を気づいているが、紫の上の気持ち自分が離れ出家にまで思い及んでいるとは思ってはいなかった。この時点で紫の上の心の中は世の無常さを思っただけで虚無になっている*注(三)。女三宮と仲良くしたり、孫の女一宮を養育したりすることで穴を埋めようと試みるが、なかなかその虚無の穴は埋まらない。果てに出家願望を口にする。出家をしたいと言い出した紫の上の言は

「いまは、かうおほぞうの住まひならで、のどやかにをこなひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと見はてつる心ちする齢にもなりにけり。さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」
(若菜下 320頁 8行)

今はこのようなおぼろの生活ではなくて紛れもなく出家をしたいと思う。この世はこの程度、と終りまで見た気のする年にもなった。どうか出家の許しを下さい (同頭注8~9参照) と源氏に嘆願する。女三宮降嫁以降、今まで以上の愛情で接してきたつもり源氏にとってなんと怖い言葉だろう。紫の上の想いはもう完璧に源氏のものにない。源氏に対して愛情がないわけではない。寧ろ愛情を源氏に注ぎ疲れたのだろう。心から源氏を愛することはもちろん、体でも六条院の安寧を図ってきた。源氏が須磨へ退去の際は、資産管理から雇っている女房たちの世話までその全てを任せられ、源氏付きの女房からも一目置かれたほどだった。陰口をいう女房をいさめもする。なぜならそれまで邸は源氏と自分のものであった。紫の上にとって、そうやって源氏に愛情を尽してきた返しが、女三宮降嫁である。源氏との関係、源氏の邸、つまりは源氏の全てをその全身全霊をかけて守ってきた紫の上。それが今やこの邸は源氏と女三宮のものになった。源氏は紫の上にも今まで以上に愛情を注いでいるつもりかもしれないが、紫の上は世の無常を思い知らされている。世の無常を知った紫の上は、

わが身はたゞ一所の御もてなしに、人にはを

とらねど、あまり年積り^{としつち}なば、その御心ばへもつ^(ひ)ぬ^(お)にとるへなむ、さらむ世を見はてめさきに、心と背きにしかな(若菜下 328頁 1行)

紫の上が思うに自分自身は、今は源氏の愛情が大きいからこそ人には劣らぬが、あまりに年をとりすぎたらその心も薄れていくし、そうなるだろう二人の行き着く先を見ぬ前に自分から世を捨てたいと思う(同頭注3~4参照)。もう源氏を信じていけない。信じていたものが壊され、守っていた世界が壊され、もう紫の上の中には何も残っていなかったのである。もしかすれば先に朝顔齋院求婚の事件がなければ何か違ったかもしれない。しかし、結局は聡明な彼女は見て見ぬふりはできても、まったく何も見ないことはできなかった。こうして紫の上はしきりに、死の淵にたっても出家したいと思うが、源氏の許しは出ず、出家はできずに終わる。

四

紫の上は、誰から見ても素晴らしい人と評される。女三宮降嫁以前はそれが紫の上の性質であり美質とよむことができたが、それ以降は素晴らしい人というものを演じているふうにも見える。その点に関して、『源氏物語作中人物事典』で三村友希氏注^{*注(四)}は

紫の上が女三の宮に歩み寄って若々しく振る舞い、幼さを演じることが出来たのは、彼女の生来の性質であるとともに、大人の余裕があったからであろう。こんなに幼い女性に嫉妬するわけにはゆかないという自尊心も、かすかな優越感もあったかもしれない。大人の分別が紫の上の空虚な役割演技を支えており、その「童心」が大人のプライドをかるうじて支えている

とする。「童心」とは、紫の上が女三宮に対し近づいていったことを『動揺を隠しての強がりにながいない』とし、その対処法を『紫の上の自尊心が、「童心」で対処していきたいという方向に向かっている』という。『聡明な紫の上は、六条院の安定のために、みずからの役割を果たさぬわけがない』ため、『本来ならば逆のベクトルに向かうところの二筋 大人性と子ども性 を、

紫の上は同時に要求され、それをみごとに体現していくことで、彼女はこの苦難を乗り越えようとする』と述べる。

しかし、紫の上はたして女三宮と関わり、優越感をもつことで本当に苦難を乗り越えようとしたのだろうか、と考える。確かに母の役割を女三宮以前にも明石姫君を養育して勤めている。子供を可愛がる性質ではあるが、彼女に子はない。明石姫君を養育することを「役割演技」といわれれば確かにそうである。その「役割演技」をすることで紫の上が自分のプライドを支えていたのもそうであろう。しかし、ひとつ気になってしまうのが女三宮に対面を願ったのは、朧月夜との浮気事件直後である。その点を考えると、女三宮降嫁は天からふってわいたようなことだから、と納得しようとしている紫の上にとって、女三宮が憎くて、優越感を感じたいがために近づいたわけではないのではないか。かといって自尊心や優越感をまったく感じなかったわけでもないだろうが、朧月夜の浮気事件の際、紫の上は見て見ぬふりをする。しかしまったく辛くないわけではない。拳句の果てには無視を決め込んだのに、紫の上のその様子を見た源氏は彼女に全てを白状してしまうのだ。無常の世を嘆く彼女にとって、同じ源氏の妻としての女三宮がどのような人物なのかふと気になった。源氏もまた女同士が仲良くすることを望む。女三宮のことも気になるし、とにかく誰にも悪くいられない行動を選択して、気を紛らわせたかったのではないかと考える。気を紛らわせようとするので乗り越えようとしたといえるのかもしれないが、それは優越感を感じるために行った行動とは思えない。それに他人を気遣う性格の紫の上にとって、日ごとに増していく源氏の愛情のせいで、ないがしろにされていると周りから思われている女三宮を気遣ったとも考えられないだろうか。六条院の安寧を守る紫の上である。女三宮を気遣って近づいたと考えられなくもない。「童心」がなくはないにしろ、それはやはり紫の上の持って生まれた性質でそれを以って対処しようと考えたわけではないと考える。

また、紫の上の若々しさという点においても氏はこういう解釈だ。

紫の上が若宮を奪い、独占しようとする行為

は「若々し」と評されているのである。実年齢に左右されない幼さ、若々しさは紫の上の美質であると思われるものの、これは決して好意的な評価とばかりは言い切れないにちがいない

また、女三宮に対し『若々しさを武器に歩み寄るのは案外たやすい』、そして『紫の上の母としての役割は、その虚構性が残酷にも暴かれて』いるという。若々しさは紫の上の美質であるのは間違いない。しかし紫の上は女三宮に対しては若々しさを武器に歩み寄ったという解釈の仕方は納得できない。若々しさを武器に近づいたのではなく、相手に合わせて見せることのできる、それは紫の上の性質であると考え。若宮に関しても紫の上は若宮を一目みたあと、また会いたくなって死ぬほど切ない思いをしたとされている。純粋に子供が好きで、自分も子供がほしかった紫の上。それ自体を虚構と解釈するのはいささか冷たすぎるのではないか。紫の上にとって、子供を可愛がるという行為は自分の中の虚無感の埋め合わせであるのは確かだが、そこに子供を可愛がる気持ちは確かにある。

紫の上はあまり人を憎むことをしたくない性格である。それは本来穏和な性格と、継母から恨まれ続けた辛さから、自分も恨まれたくない、他の人にもそんな思いはさせたくない、と感じているからなのかもしれない。人を憎みそうになったら常に他の事で紛らわせる。それは子供であることが多かったかもしれないが、子供でなくても自然観照のうちに封じこめることもあるし、香をたきしめて紛らわせることもあったのだ。子供であることが多かったのは、やはり紫の上が好きなのがあるという設定であれば、それに若々しい様子で取り組んだのではないだろうか。しかし、子を持たない紫の上が子供を可愛がる性質であるという設定は抜くに抜けないのだが。

やはり、素晴らしい人を演じているようにみえてきたのは女三宮降嫁以降、そして源氏の前と世間の目を気にするあたりが重要かと思われる。紫の上の関心ごとといえ、紫の上の世界を平気で壊しうる存在の源氏と、継母のあくまで冷たい態度に代表される一部の世間の人々の声である。紫

の上の気持ちと行動が随伴していた時は、素晴らしい人としての行動はさほど演技にも見えなかった。源氏の元から離れていった意識、しかしそれをひた隠しにして源氏と向き合う日々や自分の不幸を噂する人の声が漏れ聞こえることが彼女にとっては辛いことである。女三宮のもとへ通わない源氏に対し

「思^(おもひ)やりなき御心かな、と苦し^{くる}がり給^(たまふ)ふ」(若菜上 245頁 7行)

とある。源氏の愛情よりプライドの確保が優先されてしまっている。母としての役割に虚構性が見えるのではなく、紫の上の気持ちと行動が伴わない「若菜」の巻で、自分の思いと現実のすれ違いのはざまに「役割演技」を行ってしまうところに虚構性が浮き出たといえる。

おわりに

「若菜」の巻までは紫の上の世界はイコール源氏の世界だった。紫の上の行動を辿るとどれも全て源氏の望むままに成長し、源氏の望むような行動をとった。利発で聡明でものわがりのいい人間を源氏が望めば、その期待通りに成長した。もともと源氏から愛される容貌や性質をもっていたこともあるが、紫の上自身も源氏から愛される努力を惜しまなかった。我慢するべき時とそうでない時の区別をつけている。全ては愛する源氏のために努力を続けてきた紫の上であるが、しかし彼女が最後に知るのは世の無常であった。それも長年慕い尽くしてきた源氏によって思い知らされる。源氏物語は「若菜」の巻を境に第一部、第二部に分かれていると考えるのが通説であるように、紫の上の運命も源氏の運命も、そこから共に下降線を辿りはじめた。他の登場人物と違い紫の上は、源氏の生涯を描く物語でそれを二分するきっかけをつくるほど主人公に密着している人物であるといえる。

「朝顔」の巻以前はまだ若かったこともあって、源氏の愛情のみを信じていればよかったが、「朝顔」の巻以降はその他の、特に紫の上の地位など現実的な紫の上の所在においての信頼も必要となった。が、そのことに源氏は気づかなかった。生涯尽くして源氏を支えた紫の上に待っていたのは、源氏と紫の上、二人の世界の崩壊である。それに

よって紫の意識は源氏の元から離れていってしまう。なんとかその危機を乗り越えようと試行錯誤するが最終的には世の無常観には打ち勝てなかった。せめて周りから頂いた「素晴らしい人」という評価、それを守ることが紫の上の紫の上であるというアイデンティティだった。

しかし、その「素晴らしい人」という評価を守ることが、いつしか紫の上の重荷になっていく。死の淵に立ってまで出家したいと願うが、全て源氏に棄却される。素晴らしい人が考えなければいけないことは他人のこと、源氏のこと。虚無の中にいる紫の上にとって、他人のために人生を過ごしてきて、最後ぐらい自分のことを考える時間が欲しかったのではないだろうか。源氏はそれを許さず、いつまでも自分の元において、自分のことを考えて欲しいと願っている。源氏が全てだった紫の上は、源氏のゆるしがないと出家もできない。結局源氏が望むままに添い遂げる。出家したい気持ちと源氏の望みをかなえたい気持ち。相反する気持ちが紫の上の中に存在し、結局は最後まで源氏のことを思い死んでいくのである。

身づからの御こゝちにはこの世に飽かぬことなく、うしろめたきほだだにまじらぬ御命なれば、あながちにかげとめまほしき御命ともおぼされぬを、年ごろの御契かけ離れ、思嘆かせたてまつらむ事のみぞ、人知れぬ御心の中にも物あはれにおぼされける。(御法 162頁 5行)

紫の上の気持ちとしては今の世に不満なことはなく、子がないことはかえって気楽で、しいてこの世に命をとどめておきたいとおもうのは、先に死なないという源氏との約束を守れず、源氏を哀しませてしまうことが辛く思える(同頭注8~13参照)と思い、また、

かばかりの隙あるをいとうれしと思ひきこえ給へる御けしきを見給も、心ぐるしく、つゝみにいかにおぼしさはがんと思に、あはれなれば(御法 170頁 9行)

少しの小康状態をも嬉しく思っている源氏を見ると心苦しく、自分の最期の時にはどんなに源氏が動揺するかを考えると辛く思う紫の上(同頭注8~10参照)。源氏にあれほどの仕打ちを受けて、信頼関係は崩れていたもののそれでも強い愛情で

繋がっている。紫の上をここまで源氏に執着させるのはなぜなのかと考えたときに、夕霧の巻で答えが明かされている。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし(夕霧 132頁 14行)

女ぐらい身の処し方が窮屈で、辛い思いをしななければならない者はない(同頭注14参照)と紫の上はいうのである。この物語を通して作者紫式部が紫の上を、人を憎むことをしない、ものわりのいい、利発で聡明な、理想的な女性と描いたのは、その女性を通して、平安の女の生きづらさ、息苦しさ*注(五)、そして世の無常観を描こうとしたのである*注(六)。紫の上は作者にかばわれすぎているという考えもあるようだが*注(七)、それは作者がこの最後の一言を紫の上にいわせ、多くの人に共感してもらいたいがために、紫の上を誰からも共感を得られるような素晴らしい人物で描いたのだろう。

紫の上の生涯は源氏に振り回され、最後は自己分裂に陥りながらも、逃げることはできない平安の時代に生まれた女の生きづらさそのものである。それでもそんな中で自分の使命を全うする紫の上の強さに読者はどうしようもなく惹かれるのである。源氏物語には登場人物が昔の人からしても現代の目から見ても、その状況に同情したりその気持ちに共感できたり、いつの時代の人でも認められる表現力を以って生き生きと描き出されている。山本淳子氏が『源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり』*注(八)で、物語が「進むほどにリアリティを増し、人間洞察に満ち、精神性を深めているのは誰もが認めるところである」(230頁4行~)と述べているように、登場人物の精神性の深さが、源氏物語が生まれてから現代まで長い間愛され続ける魅力なのである。

*注(一) 『源氏物語作中人物事典』西沢正史 / 編 (フォレスト / 2007年1月20日刊)

源氏物語作中主要人物 紫の上 120頁参照
*注(二) 『源氏物語必携』秋山虔 / 編 (學燈社 / 1986年5月20日刊)

源氏物語作中人物論 紫の上 121頁参照
*注(三) 『源氏物語と仏教』中井和子 / 著 (東方

出版 / 1998年9月25日刊)

第三章 仏教と業と 本編の人々 四,
紫の上 自然 195頁参照

*注(四) 注(一)に同じ

*注(五) 『源氏物語の時代 一条天皇と后たちの
ものがたり』山本淳子 / 著 (朝日新聞社 /
2007年4月25日刊)

序章 一条朝の幕開け 紫式部家の災難 32
頁

第五章 草葉の露 紫式部の目覚め 175頁
参照

*注(六) *注(三)に同じ

*注(七) *注(一)に同じ

*注(八) *注(五)に同じ